

ノバルザック

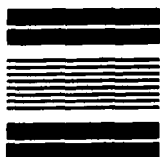
谷間のゆり

ウジェニー・グランデ

菅野昭正・水野 亮 訳

河出書房

© 1969



カラー版 世界文学全集 第8巻

バルザック 谷間のゆり ウジェニー・グランデ

昭和 42 年 8 月 20 日初版発行

昭和 44 年 7 月 1 日再版発行

訳者 菅野昭正
水野亮

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

定価 750 円

製本・加藤製本株式会社

製函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表紙・日本クロス工業株式会社

目 次

バルザック

谷間のゆり.....	3
ウジェニー・グランデ.....	233
訳 注.....	368
年 表.....	377
解 説.....	387

巻頭口絵 バルザック像（ヴェルサイユ美術館蔵）

ルイ・ブーランジェ 筆

© GIRAUDON-ORION

本文カラーさし絵

コリーン・ブラウニング 筆

© 1967 Colleen Browning

装 幀 亀倉雄策

谷間のゆり

菅野昭正訳

王室医学アカデミー会員

J・B・ナカール氏^{*}に

親愛なる博士、これはおもむろに、かつ辛苦をこめて構築された
文学的建造物の第二群の土台石^{*}において、最大の彫琢^{ちようさく}を凝らした石
のひとつであります。私はかつてわが生命を救われた碩学^{しやくがく}に感謝す
るとともに、日々の畏友^{いゆう}を顕彰すべく、ここにご尊名を刻みたいと
存じます。

D・バルザック

主要人物

フランシュ・アンリエット・ド・モルソー伯爵夫人 ルノンクール・リ
リー公爵家からモルソー伯爵のもとに嫁ぎ、トータル近郊の小村ボン・ド・リ
ュアンのクロシュグールドの城館に住んでいる。病弱で憂鬱症の夫の圧迫のた
め、結婚生活はかならずしも幸福ではないが、二人の子供を心の支えとして忍従
の生活を送る。その城館をとりまくアンドル川の谷間の風景さながらの清純な性
格で、美德の誇りに生きる女性。

フェリックス・ド・ヴァンドネス この小説の語り手。トタールの名門の家庭
の次男として生まれたが、肉親の愛情に恵まれず、不幸な少年時代を過ごす。た
またまある舞踏会の席でモルソー伯爵夫人と出会い、この年上の女性に熱烈な
恋愛感情をいだくようになる。

モルソー伯爵 大革命のために亡命を余儀なくされ、その亡命中の苦勞で心身
ともに傷つけられた老貴族。帰国して結婚生活にはいったのちも一種の生活無能
力者となり、物心両面にわたり妻の献身的努力にすがって生きている。

アラベル・グッドレイ卿夫人 イギリスの名門政治家の妻。情熱のおもむくま
ま奔放に生きる美貌の女性で、虚栄心を満足させるためにフェリックスに近づ
くとする。

ナタリー・ド・マネルヴィル伯爵夫人^{*}に

あなたの要望に屈服することにしませう。私たち男性は、女性から受ける愛よりも深い愛を女性に捧げるものなのですか、その女性の特権とは、なにごとにつけても私たちに良識の掟を忘却させるところにあります。あなたかた愛される女性の額に皺か刻まれるのを目にしたくないために、ほんの些細な拒絶に会うだけで、悲しげにゆがめられるあなたがたの唇の、あの拗ねた表情を暗らすために、私たち愛する男性は、奇蹟のように懸隔をのりこえたり、われとわが血を捧げたり、おのが将来を犠牲に供したりするのです。今日、あなたは私の過去を求めておられます。ではそれをお目にかけてみましょう。が、ナタリーよ、これだけはよく覚えておいていただきたい。あなたの要求に従うために、私がいままでみずから侵したことのない嫌悪の感情を、ついに足下に踏みにしらねはならなかったということだけは。それにしても、ときとして、幸福のさなかに私を唐突にとらえる長時間の物思いに、あなたはなぜ疑いをかけるのです？ 私が沈黙をまもっているあることがらについて、なぜ愛される女性特有のあの美しい怒りの表情をうかべるのです？ その原因を尋ねたりなさらずに、私の性格の明暗の対照と気軽に戯れては

いただけなかったのでしょうか？ あなたの心になにか暗い秘密でもあって、それが許されるためには、私の秘密が必要とでもいうのでしょうか？ 要するに、ナタリーよ、あなたはちゃんと見ぬかれたのですし、おそらく、あなたにすべてを知ってもらうほうがいいのでしょう。そうです、私の人生はある亡霊に支配されており、その亡霊は、ほんのちょっとした言葉で誘いかけられさえすれば、すぐに茫漠と姿をあらわし、往々にして、自然に私の頭上に出現して動きまわることもあるのです。穏やかな天候のときにははっきりと見え、嵐のときの大波で断片となって浜辺にうちあげられるあの海底の藻草のように、私の魂の奥底には、重苦しい思い出が埋もれているのです。もろもろの思いを表現するために否応なく強いられるこの苦業のなかには、あまりに唐突によみがえってくる場合など、私にしつに深い苦痛をあたえる往時のさまざま感動がふくまれておりますけれども、よしんばこの告白のなかにあなたを傷つけるような強烈な光があるにしても、あなたご自身か、あなたの要求に従わなければと私を脅したのだということを、どうか思いいたしてください。要求に従ったという嫌で、私を懲らしめたりはなさらないでください。この告白談があなたの優しさをますます深めてくれれば、と願っております。では、今晚また。

《フエリックス》

二つの幼年時代

私たちがいつの日にか苦悩の感動的な悲歌と画像を得られるとしたら、またやわらかな根は家庭という土壌のなかで堅い小石にばかりぶつかり、芽ばえたての若葉は憎しみの手でひきちぎられ、花々はいましも開こうとする瞬間に霜にうたれてしまうような人々か耐え忍ぶ苦悩の、こよなく感動的な悲歌と画像を得られるとしたら、それは涙を糧にして育ったどのような天才の力によるのでしょうか？ 唇は苦い乳房に吸いつき、微笑は厳しいまなざしの焼けつくような炎におさえつけられてしまう子供、私たちにそういう子供の苦しみを語ってくれるのは、いったいどのような詩人でしょうか？ 本来は周囲で感受性の成長を助けてくれるべき人々のために、逆に心を虐げられるそういう哀れな人間を描いた小説があるとすれば、それこそまさに私の少年時代のありのままの物語になることでしょう。私が、生まれたばかりの私か、どんな虚栄心を傷つけたというのてしょうか？ どういう肉体上あるいは精神上の不具のために、私は母の冷淡な扱いを受けねばならなかったのでしょうか？ 私は夫婦の義務でできた子供、思いがけず生まれてしまった子供、あるいは生きているのか呵責の種になる子供であつたのでしょうか？

田舎へ里子に出され、三年間家族から忘れられたすえ、やっと父の家へもどってきたときにもどうてもいい子供とみなされ、私は召使たちの同情を買ったほどでした。この最初の見放された状態から立ち直ることができたのが、どんな感情の助力によるのか、どんな幸運な偶然の助力によるのか、私にもとんと見当つきません。なにしろ子供の頃はなんのわきまもありませんでしたし、大人になってからもなにひとつわからないのですから。兄と二人の姉とは、私の境遇をやわらげてくれるどころか、逆に私をいじめておもしろがるのでした。子供たちにとって小さな過ちを隠す手段となり、子供たちに早くも名誉ということを教えこむあの默契なるものも、こと私に関しては存在しませんでした。それはかりでなく、私はしはしは兄の過失のために罰を受けることさえあり、しかもそういう不当さに抗議することすらできなかつたのです。子供のなかにもすでに芽ばえている諂いの根性に操られて、彼らは私を苦しめる虐待に力を貸し、自分たちもやはりこわかつていた母親の機嫌をとうとうとしたのでしょうか？ それとも、あれはややもすれば人真似におちいりがちな性癖のしからしめるところだったのでしょうか？ あるいはまた、力を試してみたいという欲求のせいだったのでしょうか、憐れみの心がなかつたためなのでしょうか？ おそらく、これらの原因が寄りあつまつて、兄弟愛の楽しさを私からとりあげたわけなのでしょう。すでに愛情の恵みはいっきに奪いとられていましたから、私はなにひとつ愛することかできませんでした。しかも、私は生まれつき情愛の深い性質だったのです！ たえず冷遇はかりされているこういう情に脆い人間の洩らす吐息を、どこかの天使が受けとめてくれるものなのでしょうか？ ある人々の心のなかでは、無視された感情はやがて憎悪に変わるものだとしても、私の心のなかでは、それは一つに集中して河床を掘り、後年、そこから私の人生の上に勢いよく溢れたことになったのです。当人の性格

にもよることですが、いつもおぼろげにする習慣が身につくと、生まれつきの気質が弱められ、恐怖心が生じてきます。そして、恐怖心はいつとも屈服を強いるのです。人間を墮落させ、なにかしら奴隷じみた根性を吹きこむ弱さは、そこに由来するのです。しかし、このたえまのない暴風のおかげで、私は、行使するにつれて威力を増し、精神的な抵抗の素質を魂に植えつける力を思ひさまふる習慣を、身につけることができるようになりました。ちょうど殉教者が新しい打撃を待ちかまえるようにして、いつも新しい苦悩を待ちうけているうちに、私の全存在はいっしょに陰鬱な諦め、幼少時に特有の愛くるしさや活発さをその蔭に押し殺した陰鬱な諦めをあらわすようになったのにちがいありませんが、こうした態度が白痴の徴候とみなされ、母のいまわしい予想を裏がきしたのです。が、この不当な仕打ちという確信によって、私の心のなかには、年齢のわりに早熟な自尊心が掻きたてられました。ああいう教育法に助長されそうな悪い傾向を、かえって阻止してくれたらしい自尊心という理性の果実か。

母にはほったらかしにされていましたけれども、それでもときおりは気づかいの対象になることもあって、ときどき彼女は私の教育のことを話題にし、自分がその役に当たりたいという希望を表明することがありました。そんなとき、母と毎日接触することになったらいったいどんな苦痛に襲われるだろうと考えると、激しい戦慄が私の背筋を走るのでした。私はほったらかしの状態を心から喜び、庭で小石と遊んだり、昆虫を観察したり、大空の青さを眺めたりしていられて幸福だと思っていました。よしんば孤独が私を夢想に導いたにはちがいないにせよ、私の瞑想好みの性質はある偶然のてきごとにも由来しているのであり、このできごとをお話しすれば、私の幼い頃の不幸の姿は、あなたの眼前にまざまざと描きだされるだろうと思います。なにしろ、私はほとんど問題にされていませんでしたから、ときには家政

婦か私を寝かしつけるのを忘れることさえありました。ある晩、一本のいちじくの木の下にそとうずくまり、子供の心をすっかりとらえてしまふあの好奇心にみちた情熱に駆られながら、しかも早熟な哀愁癖のせいで、そこに一種の感傷的な知性とでもいったものまでつづくわえながら、私はじっと一つの星を眺めていました。姉たちが遊びに興じ、さかんに騒ぎ声をあげていました。その遠くの騒がしさが、私にはまざままな想念の伴奏のように聞こえました。やがて騒ぎ声もやんで、夜になりました。偶然、母が私のいないことに気づいたので、お叱りを受けようとして、家政婦のカロリーヌ嬢という口やかましい女は、私か家をひどく嫌っているなどと言いはり、母のまちがった懸念を裏づけてしまったのです。もし彼女が注意ぶかく見張っていなかったなら、私はとくに逃げ出していたらどうか、私は知能こそ低くないが、陰險な子供なのだとか、世話を任された子供たち全部をとってみても、私ほど性質のひねくれた子にはついぞぶつかったこともないなどと、彼女は言いたてたのです。そして私を探すようなふりをして、私の名前を呼びました。私は返事をしました。彼女はいちじくの木のところへきましたか、私かそこにいることはちゃんと知っていたのです。

「そんなところで、なにをしてらしたんですの？」と彼女は言いました。

「星を見てたんだよ」

「星を見ていたのじゃないでしょ、自室のバルコニーから私たちの話を聞いていた母か、そう言いました。「お前くらいの年頃で、天文学がわかるものなの？」」

「まあ、奥さま」とカロリーヌ嬢は大きな声で呼びました。「坊っちゃんやまが水槽の栓をおあけになってしまいましたわ、お庭は水びたしです」

それで家中が大騒ぎになりました。じつは姉たちがさつきおもしろがってその栓をひねり、水が噴き出すところを見ようとしたのです。

ところが、勢いよく水が噴出して全身水びたしになってしまったので、姉たちはびびりして前後のみさかいがつかなくなり、栓を締めるとりもなく、あわてて逃げだしていったのです。このいたずらを思いついた犯人だという罪を着せられ、自分の無実を主張すると嘘をついていると叱られて、私は厳しい罰を受けました。けれども、ああ、ひどい罰だったのは、私の星への愛着が皮肉られ、夕方になったら庭に出てはいけないうと母から禁じられたことです。威圧的な禁止は、とくにそれが子供の場合、大人よりもいっそう激しい情熱を掻きたてるものなのです。大人にくらべると、子供にはひたすら禁じられたもののことばかり考えるという強味があり、しかもそうになると、禁じられたものはなんとも抗し難い魅力を示すようになるのです。そこで、私はたびたび星のために、鞭のお仕置を受けたことがありました。心のなかを打ち明けられる相手がいなかったのです、私はあのいとも楽しい内心のおしゃべりにふけりながら——昔はじめて言葉を感じたときそっくりのたどたどしい口のききかたでもって、子供心にはじめて芽ばえた考えをぎこちなく語っていく——あのいとも楽しい内心のおしゃべりにふけりながら、私の好きな星にむかって悲しみを訴えたのでした。十二歳になって中学校へはいってからも、まだ私は言いしれぬ歓喜を覚えつつその星を眺めたのですが、人生の朝まだきに受けた感銘というものは、それほど深い痕跡を心に残すものなのです。

私より五つ年上のシャルルは、いまのあの美貌そのままで、当時からきれいな子供でした。彼は父の秘蔵の子であり、母の溺愛的であり、家族の希望であり、したがって一家の王さまでした。体つきがすらりと整った丈夫な子であったのに、彼には家庭教師がついていました。いっぽう、私のほうはみすばらしい虚弱な子供であるのに、五

歳のときに町の私塾へ通学生として通わされ、父の従僕に朝晩の送り迎えをされました。私は、なかみの少ないお弁当のバスケットをもって出かけていったのですが、それにひきかえ、仲間の子供たちはたっぷり食糧をもってきました。私の貧しさと仲間たちの豊かさとのこの対照から、数しれぬ苦しみが生まれることになりました。家での朝食と夕食、夕食の時間というのは私たちの帰宅時間と一致していたのですが、そのあいだお昼どきにとる食事の主要品目は、あの有名なトゥールのリエットとリヨンでした。この加工食品は、ある種の食通からはいへん珍重されていますが、トゥールでは貴族の食卓にはめつたにあらわれないものなのです。私塾に入れられる前から話こそ聞いておりましたが、自分の食べるタルティヌの上にその褐色のジャムが塗られるところを眼のあたりに見るという幸福は、ついぞ味わったことがありませんでした。しかし、よしんばそれが私塾で流行していなかったとしても、私の欲望はやはり激しいものだったでしょう。というのも、あるバリのもつとも優雅な公爵夫人が、門番の女のつくるシチュウに食欲をそそられ、女性であることをうまく利用して思いをとげたというあの話のように、それは私の偏執になっていたのですから。子供というものは、他人の視線のなかから、ちょうどあなたがた女性が恋を読みとられるのと同じく、渴望の色を見ぬいてしまうものなのです。そこで、私は恰好のからかいの的になりました。私の仲間の子供たちは、ほとんど全部が小市民階級に属していましたが、そのすばらしいリエットを私にみせびらかしにやってきては、製法や売っている場所を知ってると尋ねたり、なぜ私がもってこないのかと聞いたりするのです。ラードでいためた豚の屑肉でできていて、ちょうど松露を煮た料理に似ているリヨンを、彼らはしきりに得意そうにみせびらかしながら、舌なめずりをするのです。そして私のバスケットを検査し、オリヴェのチーズか、さもなければ干した果物しか見あ

たらないので、「へえ、きみ、食べるものがないの？」などと言って私をたまらない気持ちにおとし入れるのでしたが、こういう言葉を通して、私は、兄と自分との差別待遇かどんなに大きいかということに気づかされました。

私のほったらかしの状態と他の子供たちの幸福とのあいだに、こうしたいちじるしい対照があったために、私の楽しめるべきばら色の幼年時代は汚され、みずみずしい緑の少年時代は萎えさせられてしまいました。最初一度だけ、私もいかにも思いやりの深そうな感じにだまされて、偽善的なようすでさしだされたその宿望のごちそうを受けとろうと手をたししたことがありましたが、相手のいたずら好きの少年はすぐそのパンをひっこめてしまったので、こうした結果をあらかじめ承知していた仲間たちはどっと笑いました。このうえなく卓越した精神の持主たちでさえ、なおかつ虚栄心に動かされやすいもののだとしたら、軽蔑され冷笑されて泣く子供を、許してやれないはずありませんか？　こないたずらをされて、食いしん坊になり、欲しがりになり、卑怯になった子供がどんなにたくさんいることでしょうか！　いじめられまいとして、私は喧嘩ばかりするようになりしました。絶望のはての勇氣が、私を仲間からこわかれる子供にしてくれましたが、しかしまた憎悪の的にもなり、陰險な不意打ちに出会って、も策のほどこしようもない状態に陥ったのです。ある夕方、帰宅する途中で、小石をいっばい詰めこんだまるめたハンカチを、背中にぶつけられたことがあります。従僕が手荒く仕返しをしてくれましたが、彼がこのときごとを母に話すと、母は声を張りあげてこう言いました。

「このしょうのない子は、これから、わたくしたちを悲しませてばかりいるのてしうねえ！」

家族が私にいだいている疎ましさが、私塾のなかにもやはり見つ

つたものですから、私はすっかり自己嫌惡に陥ってしまいました。それでも、家にいるときと同じように、自分の殻に閉じこもるようになりました。二度目の雪のために、私の魂にまかれた種の開花はさらに遅れてしまったわけです。みんなにかわいがられている連中はほんとのすれっからしなだ、私の自尊心は、そういう觀察に支えられていました。そして私はひとりぼっちのままでした。こうして、私の哀れな心に充滿しているもろもろの思いを、すっかり吐きだすことのできぬ状態かつづいたのです。私がいつも陰氣にふさぎこみ、みんなに嫌われ、孤独にしているのを見て、私はひねくれた性質たという家族のましかった推測を、先生までが承認してしまふありさまでした。読み書きができるようになると、母はさつそく私をボン・ル・ヴォワに転校させましたが、これはオラトリオ修道会の経営になる学校で、私と同じ年頃の子供たちは「ラテン語未修者」クラスに入れられ、このクラスには、また知能の程度が遅れていてラテン語の初歩にはいけない子供たちも残っていました。

私はその学校に八年間おりましたが、誰とも会おうとしないで、仲間はずれの生活を送っていました。その経緯と理由はこういう次第なのです。私は小遣いとして毎月三フランしかもえませんでした。これは自分で準備しておかねばならないペン、ナイフ、定規、インキ、紙などを買うのに、かろうじて足りる程度で金額でした。ですから、竹馬も、縄飛びの縄も、そのほか学校での遊びに必要な道具もまるで買えなかったのです。そのため私は遊びから除け者にされてしまいました。仲間入りを認めてもらうには、同じ組の金持ちの子のご機嫌をとったり、腕力の強い子にお世辞を言ったりすればよかったのです。子供はふつうそういうことをいともたやすくやってしまうものですが、私としては、そういう卑劣なことはほんの些細なことですが、胸がむかむかしてくるのです。私はうら悲しい夢想にふけりな

がら、とある木の木蔭にじっと坐りこんで、図書係が毎月一度私たちに配ってくれる書物を読みました。このおそるべき孤独の底に、どれほどの苦しみが隠されていたことでしょう！ 私のほったらかしの状態から、どんな苦悶が生まれたことでしょう！ ラテン語作文とラテン語訳読との賞という、もともと尊重されている賞を二つも獲得した最初の賞品授与式にあたって、私の感じやすい魂がどういう感情にひたつたか、どうか想像なさってみてください！ か、拍手と賞賛の声のわきあがるなかを、その賞を受けとりに演壇にのぼっていくときですら、私を祝福してくれるべき父も母もその場にいませんでした。式場の平土間は学友全員の両親でいっぱい埋められているというのに。慣例にしたがって、賞品授与者の手に接吻することをしないで、私はいきなりその胸のなかに駆けこみ、わっとばかり泣きだしてしまいました。その晩、私は授与された王冠を暖炉で焼きすてました。賞品授与式の前の一週間は課題練習にあてられていましたが、父兄たちはその頃もう町に泊まっていた。ですから、仲間たちはみんな午前から楽しそうに飛びだしていくのです。それにひきかえ、私ときたら、両親がそこからわずか数リュー（フランスの古い距離の単位で、一リューは約四キロにあたる）のところにいるというのに、海外組、これは家族が仏領の島々とか、外国とかにいる生徒につけられていた名称なのですが、その海外組と一緒に校庭に残っていました。夜になると、お祈りの時間のあいた、思いやりのない連中は、両親といっしょに食べたおいしい夕食のことをしきりに自慢するのです。これからずっとご覧になっていくはずですが、私が足を踏みいれていく社会圏の円周のひろがりにつれて、私の不幸はだんだん大きくなっていくのです。

一人で生きていくべしと宣告するかのときこの判決を破棄するた
め、私はどれほどの努力を傾けたことだったでしょうか！ あまたの
憧憬をこめて長いあいだ心に暖めてきた希望が、たった一日で破壊さ

れることがいったい何度あったでしょうか！ 両親に学校へいってみようという気持ちを起こさせるように、私は真情のこもった手紙を何度か送りました。ことによると、この手紙は大げさな書きかたになっていたかもしれません、しかしそれにしても、これがはたして母の叱責を、私の文体について皮肉な調子で小言を言ってきた母の叱責を、買わねばならぬようなものだったでしょうか？ 私は氣を落とさずに、両親が来訪につけてきたさまざまな条件は全部履行するから、と約束しました。私は姉たちの援助を懇願し、二人の誕生の祝日がくると、ほったらかしにされた哀れな子供らしいきちようめんさで手紙を出したのですが、しかしけっきょく、それも無駄な頑張りでした。賞品授与式が近づくとき、私はいっそう頻繁に懇願を繰り返し、賞をとれそうな予感かすると知らせてやりました。両親の返事かないのにだまされて、私は胸を高鳴らせて両親を待ち、仲間たちにそれを予告しました。そして、家族の人々がやってきて、生徒を呼びにくる門番の老人の足音が校庭に響くと、心臓が病的に激しく動悸しはじめるのです。が、この老人は、ついに一度も私の名前を呼んではくれませんでした。

私が生を呪った罪を懺悔した日、私の懺悔を聞いてくれた神父は、キリストの「幸いなるかな、悲しむ者」（マタイ伝第五章三節にある、山上の垂訓の一節）という言葉葉で約束された栄誉の棕櫚の咲きひろく天国のことを、私に教示してくれました。そこで、最初の聖体拝受のとき、私は童心を魅了する教訓的な夢幻性をそなえたさまざまの宗教的観念にひかれて、祈禱の神秘的な深みへと没入したのでした。熱烈な信仰に駆られて、私は殉教者列伝で読んだあの魅惑にみちた奇蹟を、私のためにもう一度繰りかえしてくださいよう神に祈りました。五歳のとき私は星のなかに舞いあがりましたが、十二歳のときには聖殿の扉を叩きにいったのです。私の恍惚とした状態は、私の内部に、想像力を豊かにし、愛情を富ま

せ、そして思考力を強めてくれる筆舌につくしがたい夢想を生んでくれました。こうした崇高な幻想は、私の魂を聖なる運命に慣れさせる任務を負った天使たちのおかげで得られるのだ、私はしばしばそんなふうに思うことがありました。なにしろ、この崇高な幻想によって、私の目には、事物の奥深くにひそむ霊を見ぬく能力があたえられたのですから。そしてまた、その幻想が私の心に呪術を受けいれる準備もほとこしたわけですが、この呪術こそは、自分の感知するものと現に存在しているものとを比較し、望んでいる偉大なものとすてに獲得ずみの些少なものを比較するという宿命的な能力がそなわっている場合には、人間を不幸な詩人にするものなのです。さらにまた、こうした幻想は、私の頭のなかに一冊の本を書きこんで、私の語らねばならぬことをすぐに読みとれるようにしてくれましたし、私の唇の上に即興詩人の火を点火してくれました。

父はオラトリオ会の教育の及ばず効果に若干の疑問をいだき、ボン・ル・ヴォワまで私をひきとりにきて、今度はバリのマレー区にある私塾^{ル・ヴォワ}にはいらせました。私は十五歳でした。私の学力について試験が行なわれ、ボン・ル・ヴォワの修辞学級の生徒は第三学級に相当すると判定されました。家で、小学校で、中学校で味わった苦しみは、このルビートル塾に在学するあいだ、今度はまた新しい形で見いだされることになりました。父は金をまわてくれませんでした。私が食事を給与され、衣服をあたえられ、ラテン語をつめこまれ、ギリシャ語でぎゅうぎゅう言わされていることが両親にわかれれば、それで万事解決でした。学生生活の期間を通して、私はほぼ千人ほどの学友と知りあいましたが、ただの一人といえども、これはと冷淡に扱われている例に出くわしたことはありません。ブルボン王家に熱狂的な愛着をもっているルビートル氏は、忠実な王党派の人々が王妃マリー・アントワネットをタンブル寺院から奪い返そうと試みていた当時、私の父と

交渉をもっていたのでした。そして、二人はまた旧交を暖めたというわけでした。ですから、ルビートル氏としては、父の冷たさの埋めあわせをしなければならないという気持ちでいたのですか、なにしろ私の家族の意向がわからないものから、彼が月々私にくれる金額はとるにたらずぬものでした。塾は昔のジョワイユーズの館^{ジョワイユーズの館}に設けられており、往時の封建領主の館かすべてそうであるように、ここにも門番の小屋がありました。薄給^{見習教師}の僕が私たちをシャルルマリーニョ高等中学校へ引率していくまでの休憩時間のあいだに、裕福な学友たちは、ドワジーという塾の門番のところへ朝食を食べにいきました。ルビートル氏は、まさに密輸業者というべきこのドワジーの商売を知らなかったのか、さもなければ黙認していたかどちらかですが、とにかく生徒たちにとつては、彼をだいじにするほうが都合よかったのです。彼は私たちがこっそり脱けたときの秘密の付添人であり、婦りが遅れたときの腹心の友であり、禁じられた書物を貸しあう仲間の仲介人でしたから。牛乳入りのコーヒーつきで朝食をしたためることは、当時の貴族趣味となっていたのですが、ナボレオンの時代に植民地の物産が途方もない値段にはねあがったという事実で、その理由はあきらかになりました。コーヒーと砂糖の常用が両親たちの場合には贅沢の一つになつていたとすれば、私たちのあいだでは、それは虚栄心にみちた優越感、よしんば人真似をしやすい傾向とか、旺盛な食欲とか、流行の伝染力などという条件が充分に整っていなかったとしても、なおかつ激しい欲望を生み出したろうと思われるほどの優越感を示すものでした。ドワジーは私たちに貸し売りをしてくれましたが、彼としてみれば、生徒の体面を認めて借金を払ってくれる姉なり伯母なりが、私たち全員にいるはずだと予想していたのです。私は長いこと簡易食堂の快楽に抵抗しました。もしも私の裁き手たちが誘惑の力の強さや、ひたすら禁欲をめがける私の魂の克己心にみちた熱望や、長い抵抗の

期間中じっとおさえていた怒りなどに精通してくれたら、彼らとても私の涙を流れるままに任せたりはしないで、それをそっとふきとってくれたことでしょう。けれども、まだ子供だった私が魂の偉大さ、他人の侮蔑をこちらから侮蔑しかえすだけのあの魂の偉大さを、はたしてもつことかできたでしょうか？ それに、私自身にしても、おそらくはもうろの社会の悪徳の攻撃に冒されていたでしょうし、しかもその悪徳の力は、私の欲望のために、いっそう増大していたわけなのでしょう。

二年目の暮に、父と母かバリーにやってきました。到着の日とりは兄が知らせてくれました。兄はバリーに住んでいるのに、それまでただの一度も私を訪ねてきてはくれませんでした。姉たちもこの旅行に加わり、私たちはそろってバリ見物をするようになっていました。最初の日はすぐフランス座へいけるように、パレロワイヤルで夕食をとる予定でした。その思いがけぬ楽しい行事の計画が私を陶醉させてくれましたが、それにもかかわらず、私の喜びは、不幸に慣れた人間の心にも速やかに効果をおよぼす一陣の暴風によって、あっさり吹き払われてしまいました。ドワジーの奴か自分でこの両親に請求すると脅かすので、彼のところに百フランの借金があるということを、打ち明けざるを得なくなったのです。私は兄にドワジーの代弁者、私の後悔の念の伝達者、お許しを得るための仲介者になつてもらうことを考えつきましたが、父のほうは寛大なようすを示してくれました。ところが、母は冷酷そのもので、濃い碧い色の目で私をその場に立ちすくませ、そつとするような予言の言葉を投げつけてきました。十七のときにそんな大それたまねをするようでは、いったい、これからさきどうなるのかしら？ ほんとに自分の息子なのだろうか？ いまに家族を破産させるのではないかしらん？ 家は自分一人だともいうわけなの？ 兄さんのシャルルが志望している道ならば、べつに独立した

財産をわけてやる必要はないともいうつもりなの？ シャルルのほうは一家の名誉となるような品行の正しきでもって、もうちゃんとそれくらいのことをしてもらう資格は得ているのに、お前ときたら反対に一家の恥になろうとしているのだから。二人の姉さんが持参金なしで結婚できるかどうか？ お金の値打ちも、また自分にどのくらいの費用がかかっているかということも、知らないというの？ 砂糖やコーヒーが、教育にとってなんの役に立つというの？ そんな行ないをしているということは、つまり、あらゆる悪徳を覚えこむことではないのかしら？ マラーも私にくらべれば天使たというわけです。私の心のなかに数しれぬ恐怖を流しこんだこの奔流の衝撃をじっと我慢したのち、私はすぐさま兄に連れられて、塾へ帰らされてしまったのです。こうして、私は「フレル・プロヴァンソー」の夕食も棒にふり、タルマの「ブリタニクス」も見られなくなりました。十二年間会わなかったあぐくの母との会見は、こんなふうにして行なわれたのでした。

古典学級（当時の高等中学校の名称）を終了してからも、父はやはりルビートル氏に私の監督を委ねました。私は高等数学を勉強し、法科の第一学年にはいって、大学の課程をはじめることになっていたからです。自室をもつ寄宿生になり、教室の授業にもあまり縛られなくなったので、私は、惨めな境遇と自分とのあいたに一時的な休戦かくるものと思いました。だが、十九歳になっていたにもかかわらず、いや十九歳だったためかもしませんが、かつてろくな食物もなしに小学校へ通わせ、お小遣いもなしに中学校へいかせ、ドワジーを債権者にする羽目に陥らせたあのやりかたを、父はまたもや続行したのです。私には、思い通りに使える金などはほとんどありませんでした。金をもたずに、バリでなにができるでしょう？ その上、私の自由は巧妙に束縛されていました。ルビートル氏は、ある薄給を付添わせて法科大学

まで私を送らせ、その男か私をいったん教授の手に引き渡し、あとでまた迎えにくることになっていました。私の身辺を守るために、母が心配に心配を重ねて思いついたさまざまな予防措置ときたら、どんな娘の身を守るための用心深さといえども、とてもおよばないくらいのものでした。パリが私の両親を法えさせたのも当然です。男の学生たちにしたところで、寄宿寮で娘たちの関心の的になっているのと同じこととがらでもって、ひそかに頭をいっばいにしているのです。よそでどういうことが起こってしようと、娘たちは相も変わらず恋人のことばかり、男の学生たちは女のことばかり話しているでしょう。しかし、パリでは、その当時、学生仲間の会話は、バレロワイヤルという東洋的なサルタンふうの世界のことでもちきりになっていました。バレロワイヤルは、夜ともなれば金塊がすっかり貨幣となって流れだす恋の黄金郷でした。そこでもっとも純潔な疑問すら消えうせ、私たちの燃えさかりはじめた好奇心も癒されるのでした！ が、バレロワイヤルと私とは、互いに近づきながらもいつこう出会うことのできぬ漸近線でした。運命がどんなふうに私の企図を挫折させたか、そのいきさつはこういう次第なのです。

父がサン・ルイ島に住んでいるある伯爵のところに私を紹介しておいてくれたので、私は毎週木曜日と日曜日に、その家へ晩餐をごちそうになりいくことになっていました。いつもはルビートル夫人カルビートル氏かに連れられていくのですか、その日はたまたま夫妻が外出する日に当たっており、晩に帰宅の途中でまた私を迎えにくるということになりました。これはなんとも奇妙な気晴らしでした！ リストメール侯爵夫人（フェリックスの母の姉で、『令問』は、私に一エキュクレようという考えなど一度として思いうかべたこともない、儀式ばった気位の高い貴婦人でした。大伽藍のように年をとり、細密画のようにお化粧し、豪華な衣裳に身をかためた夫人は、その館のなかで、さなが

らルイ十五世がまだ在世中であるかのような暮らしかたをし、もっぱら年とったご婦人とか貴族連などに会うだけでしたが、これがまた化石になった体の集まりみたいなもので、座に加わっているとまるで幕場にもいるような気がしてくるのです。私に言葉をかけてくれる人は誰もいませんでしたし、さりとて、こちらからさきに話しかけるほどの気力も感じられません。敵意のこもった視線、あるいは冷たい視線におつかると、私はみんなに迷惑がられているらしい自分の若さが、恥ずかしくなってくるのです。こういう無関心につけこめばうまく脱けだせるはずだと私は考え、いつか晩餐が終えたらさっそく姿をくらし、木造館へ飛んでいこうともくろんでいました。いったんホイス（トランプ遊）をはじめようものなら、伯爵はもう私のことなど気にもとめようとしません。伯爵の部屋つきの従僕であるジャンも、ルビートル氏のことなどほとんど気にかけていませんでした。しかし、このろくでもない晩餐というやつは、みんなの顎が老朽していたり義齒が不完全だったりしたために、いつも長びいてしまうのでした。やっとある晩、私はまるで出奔の日のピアンカ・カペロのように胸をときめかせながら、玄関の階段のところまでたどりつきました。ところが門番が扉をあけてくれたとたん、往來にルビートル氏の馬車が見え、息切れのした声で、私を呼んでくれと頼んでいる老人の姿に出くわしてしまつたのです。さらに偶然は三度までも、バレロワイヤルの地獄と私の青春の天国とのあいだに、宿命的に立ちをはたかりました。二十歳になったのにまだ無知でいることに恥ずかしく思い、どんな危険を冒しても、とにかく決着をつけようと決意した日のことでした。ルビートル氏が馬車に乗りこもうとするすきに——これかなかなか難しい作業だったので。なぜなら、彼はルイ十八世のように肥っていて、その上、びびり足でしたから——置きざりにして逃げだそうとしたその瞬間、なんとまあ、母が駅伝馬車でやってきたのです！ 私は

母の視線でその場に釘づけにされ、蛇に見こまれた小鳥のように立ちすくんでしまいました。どんな偶然で、母に出くわす羽目になったのか？ それはしごく当然のことなのです。当時、ナポレオンは最後の反撃を試みていたところでした。父はブルボン王家の復活を予測し、当時すでに皇帝政府の外交官の職にあった兄に、情勢を教えにきたのです。父は母を伴ってトゥールを発ってきました。敵の進撃ふりを筋道立てて理解できる人々からすると、首府は危険にさらされているようにみえていたのですが、私にその首府の危険を避けさせるために、母のほうは、私をトゥールに連れて帰る役目を引き受けたというわけだったのです。

すぐさま、私はバリから連れ去られました。それも、バリ滞在が、私にとって運命を決するものとなろうとしていたその瞬間に。おさえつけられた欲望でたえず想像力を掻き立てられる苦しさのために、また、たえない窮乏で暗く閉ざされた生活の心労のために、私としては、昔みずからの運命に疲れてた人々が僧院に閉じこもったのと同じように、勉学に打ちこむより仕方なかったのです。私の心のなかでは、勉学は一つの情熱と化していたのですが、この情熱が私にとってはどうにもならぬ運命的なものとなり、青年が春のごとき天性の幻想的な躍動に身をゆたねるはずの時期のなかに、私をいつまでも閉じこめることになったのかもしれない。

こうした少年時代の簡単な素描から、あなたは数しれぬ悲歌を見通されたことでしょうが、このような素描こそ、少年時代が私の将来に及ぼした影響を説明する上に、ぜひとも必要なものであったわけなのです。このような数々の病的な要素に悩まされたせいでも、二十歳を過ぎて、私はまだ体も小さく、やせこけて、蒼白い顔をしていました。もろもろの欲求がみちあふれた私の魂は、外見こそ虚弱そうに見えるけれども、トゥールのある老医師の言葉によれば、じつは鉄のよ

うに頑健な体質が最後の融合を行ないつつあった体とのあいだに、戦いをまじえていたところでした。体の上ではまた子供なのに、考えの上では老成していた私は、たくさんの本を読んだり、多くのことを思いを凝らしたりしましたので、まさに人生の隘路の曲がりくねった難所や人生の平原の砂地の道が見えはじめようとする瞬間に、すでに人生の高遠さというものを形而上的に認識できたのです。さまざまな異例の偶然が重なったおかげで、私はあのすばらしい歓喜の時期、魂の最初の惑乱があらわれ、魂が官能にめざめ、そして魂にとってはいさかいが味わいに富み新鮮であるあのすばらしい歓喜の時期のなかに、いまだに踏みとどまっていたわけなのでした。私は勉学のために引きのばされた思春期と、遅ればせに緑の枝をのばした成人期との中間にあったのです。感したり愛したりすることにかけて、その当時の私以上に、深い準備を受けた青年はたぶん誰もいなかったでしょう。私のこの物語をよく理解していただくために、どうぞあの青春時代というものをお考えになってみてください。口は嘘で汚れているということがなく、まなざしはたとえ欲望とあらはらな臆病さで重く垂れさがった顔に覆われてはいるにせよ、なおかつ率直さにかがやき、精神は世のなかの偽善に順応することがなく、おずおずした心と直情的な衝動の高邁さが激しき点で匹敵しているような、そういう青春時代のことを！

母に同行したバリからトゥールへの旅のことについては、べつにお話するつもりはありません。母の言動の冷淡さのために、私の愛情の躍動はおさえつけられてしまいました。新しい宿駅を発つたびに、私は今度こそ話しかけようと決心するのです。ところが、一目しろつと見られたり、一言なにか話しかけられたりすると、あらかじめ慎重に考えぬいておいた前置きになるはずの言葉か、つい口に出せなくなってしまうのです。オルレアンで、ちょうど床に就こうとする間際